

# 地理的認識過程よりみたロシアと北東アジア

押野 昭生

【要約】 この小論は次の三つの目標より成つている。

第一にはヨーロッパ人のアジア認識とそれを促進せしめた背景としての金銀島の問題をとりあげ、それにおくれればせながら参加しようとするイギリスの北東航路探究が偶然の機会にロシアと接触し、これを刺激して東方への進出を惹起せしめた情勢を検討すること(一、二各章)。第二はこの西欧の動きに刺激されて東方へ進出するロシアが、コサツクの軍事探検を前哨としながら、一八世紀以後、ペーリングに代表される科学的探検に代つて行く過程、およびその結果が従来 *Terra Incognita* とされた北東アジア・アニアン海峡の解明に大きく寄与したことを当時のそれぞれの段階における地図によつて解説する(五、六各章)。第三には一八世紀の地理学的探検がピョートル大帝の意志によつて行われた近代化政策の一環をなしたものであつて、西欧的學術体制の整備を基礎として、西欧の学者によつて指導されたことを明らかにする。そして、このような環境のなから漸次ロシア人の地理学者が養成され、ロシア近代地理学が建設されて行つたこと。草創期のロシア近代地理学にとつて、一貫して北東アジアが好箇の素材となり、フィールドとなり、近代地理学を育む条件を提供したことを示そうとするものである(七章)。

地理学におけるルネサンスは Ptolemaeus の復興に始ま

るといわれる。<sup>①</sup>そして、近世以降の科学的地理学やこれを

総合的に表現する地図の進歩はすべてここに発源するとい

つて過言ではない。

そこはかたなくルネサンスの香をわれわれに伝える Sebastian Münster の *Cosmographia Universalis* の文化

と人間に対する異常な関心にも不拘 Ptolemaeus の世界が、羊皮と木でつくられた表紙の間に占むべき座を有している。

この Ptolemaeus の地図が一五・一六世紀において、いかにしはしは復刻されたことか、Skelton, A. E. や Bagrow,

「<sup>①</sup>」のあげるものだけでもすでに一〇指に余るのである。

このような古代科学にもとづく地理学の復活はそのこと自体としても重要である。そして、これを受容れた当時の人々の世界観は、フランシス・ベイコン（1561～1626）にみられるように、歴史はただ人間が人間みずからの環境を克服する過程としてのみ書き記さるべきであり、その主題は「自然の解釈と人間の自然支配」にあつた。彼は当時の政治の背後に経済的実在を透視し、人類の過去の業績と未来の希望とを人間の自然支配という観点から、しかも人間の文化の他の諸側面を否定することなしに視ようとした。<sup>④</sup> Platonæus を出発点として成長して行つた近世初頭の地理学が、そのスタートにおいて、すでに人間や文化に対する意識以上に自然の理解の一方向として、地表を陸地の輪廓・水陸の分布などの視点から研究の対象としたことも自然の成行きであつた。

この様な動向は地理学史における Cosmographia の時代から、ワレニウス<sup>⑤</sup>にみられるような自然地理に重点を置いた時代の推移にも窺われるところである。

そして、その際地理的知識に対する欲求をもたらしたも

のはまず第一には地表における未知の土地であつた。すでに視圏に入つた土地の彼方には魅惑的な神秘郷が人々の心を捉えていた。現在の我々には恐らく想像もつかない強い魅力が地球上には存していた。地表の全貌がほぼ明らかになるまでのこの魅力こそ、近世初頭以来の地理的発見を支えた近代的な探究の精神の故郷であつた。これこそ地理的発見時代の原動力であり、科学的知識の発達とともにかゝる限りなき探究の精神の母胎をなしていた。<sup>⑥</sup>

なにもここでイスパニア人やポルトガル人の探検航海をそのまま学術探検であると強調する意志は毛頭ない。それにしてもこれを支えた背景には地理的視圏の拡大の要求があり、しかもこれを未知の土地に対して敢行した探究の精神と経済的な実力が存していた。だからこそ地理的発見時代を導く諸発見が行われ、世界が地表のすべてを意味することとなり、その主体となつたヨーロッパ人が以後の世界史の中心となつたのである。<sup>⑦</sup> たしかに地理的発見時代のもたらした陸地の輪廓や水陸分布に関する知識の発展は極めて顕著であつて、以後の地図学の発展を導いた。<sup>⑧</sup> そして、それに続く世紀にも尚さかんに探検事業は遂行されて行つ

た。

しかし、地理学が求めていたものは単なる視圈の拡大であり、第二義的にはそこに産する特殊な資源に関する知識であつた。地理的発見時代を通じて、そしてそれに続く時代において、イエズス会士の活動なども見られたとはいえ、地理学の領域ではついに人間や文化をとりあげることをしなかつた。探究のころはその対象を地表における視圈の拡大に限定するとともに、徐々に発達しつつあつた商業資本主義的社会経済の体制は商品としての資源、貨幣としての貴金属と、生産物の販売のための市場を要請したのである。

## 二

ゲシュタルト心理学の教える処によると、記憶や印象はすべて具体的な形象をとつて存在し、その全体と構成要素との関係は極めて緊密であるとしている。<sup>⑨</sup> 地図が空間という三次元の拡りを二次元の平面に投影するという事実は単に地図が静止した自然そのものの再構成であるに止まらなないのである。地図は本来的に *Raumtreu*, *Naturtreu* を示

すものではなく、製作者の世界観との結合において却つて歴史的・社会的な所産としての性格をつよめたりする。<sup>⑩</sup> しかも、理性が非合理的な制約を受けた古代や中世においてはことにさうであつた。それは本質的に文化の発達に即応して発達せねばならぬ宿命を秘めていたのである。

旧約聖書の昔から、未知の土地へ乗出せうとする人間の動機は理想郷や富への憧れにもとづいていた。しかもこれらの土地はそれぞれの時代における既知の土地には本来的に存しないものであつた。オフイルにせよトゥーレにせよ東方の君子国にせよ、それらすべて地理的知識の限界を示す Landmark であつた。<sup>⑪</sup>

一五・一六世紀に復刻された *Ptolemaeus* の地図をみるとエクメネーの北端にトゥーレがあり、西端に幸福の島 (*Insulae fortunatae*)、東端に黄金の半島 (*Aurea chersonesus*)、南方にキリスト教国の聖王プレスタージョンの旅行伝説を有する *Aethiopus* が記されている。

黄金の半島は *Ptolemaeus* の地図によると、陸地が印度洋の東側を南下して南方大陸につらなる附近、現在のマレー半島を思わせる位置に記されている。黄金の土地に関し

つて Ptolemaeus 以前にも *Pomponius Mela* 及び *Plinius Secundus* に現われており、*Periplus Maris Erythraei* にも金の豊かなガンジスの近傍の極東なる土地の *Chryseae* のことが記されている。Ptolemaeus にはまた *Argyre* という島名もインド洋中に存して金銀の島となつてゐる。このインド洋中の金銀島は *Solinus*、や中世の人々の伝承にうけつがれるが、しかし、古典時代以後にみられる金銀島はその想像的、非合理的な記述を現実に適合せしめようとする努力のあらわれにすぎなかつたのである。

アジアの黄金は九世紀以降のアラビヤ人の記載に示され、豊富な金を有す *Wakwuk* の存在を伝えてゐる。即ち、*Ibn Khordadbeh*, *Kazwini*, *Dimashki*, *Ibn al-Wardi*, *Idrisi* などの多くの著述に現われており、初期の書には支那の東又は極東にあらわれ、一部には東南に位置せしめてゐるものもある。また *Sila* の島は *wakwuk* と同じく金に富み、一四世紀の *Abul-Fida* の地理書では西方の *Insulae fortunatae* に対する東の島となつてゐる。ここに於て、*wakwuk* にせよ *Sila* の島にせよ黄金と東方と理想郷の三要素を有するきわめて観念的な記載とみることが出来るので

ある。

一三世紀の *Marco Polo* のジパングの記述はあまりにも著名である。しかし、それはただちに日本の金を示すものではなく、ただ東方金島の説話と結びつくところに重要な意味を有するのである。*Zipang* の地名は一四七四年の *Toscaneli* の世界図、一四九二年の *Martin Behem* の地球儀などにも記されており、ヨーロッパの地図においては新大陸並みの扱い方をされているのがわかるのである。

ヨーロッパ人の東漸とともに古来の黄金半島にまつわる金はヨーロッパ人の注目をあびるに至つた。そして、有名な *Rins Horton* をはじめ、一六世紀頃の *イスパニア・ポルトガル・オランダ* の航海者たちは *スマトラ* の周辺にこれを置いてゐる。東方への知識の発展した一六世紀において古来の *ジャワ・スマトラ* 周辺の金島はなお残存すると共に東のきわみの黄金郷が *Polo* によつて漸く固成され、以後の地図家によつて実際より遙か南方に位置した日本が次第に北上する。そして、一六世紀の末頃には東南アジアの金銀島は、漸次 *フィリピン・台湾・琉球* と北上しながら、やがて消滅して行く。

一六世紀末より一七世紀初頭に至ると、すでに日本と金銀島の結合は過去のものとなされている。この様な過程に出現する金銀島の認識はこの幻想的な島の追求においてカメラのフラインダーのように二つの像が合致するとともに再び分離して行く。そして、二重の像の一方は次第に日本として固成されて行き、他はこれと分離してさらに北或は東へ、そして北東へと流動して行く。一五八九年の *Otteri: Maris Pacifici Novissima Descriptio* と題される地図にはすでに日本の北方に海峡をへだてて *Argyra haec forte Antiquorum* と註記される *Isla de Plata* なる一島が示されている。

その後、ノヴァイスパニアとマカオを往復するイスパニア船が日本の東方約四〇〇哩、北緯三九〜四〇度の間に金銀の島のことを示している。

われわれによく知られているビスカイノヤタスマンヤフリースの探検も、すべてこれら日本の北或は東に位置すると考えられた金銀島発見の試であった。

タスマンは北緯四二度、日本の東方、六〇〇哩まで進んで金銀島を発見することが出来ず、一六四三年フリースは

北海道・樺太の東端北緯四八度まで達したのであつて、この航海は当時北太平洋へ最も深く進入したものの如くであつた。<sup>⑧</sup>

しかし金銀島はついにその姿をあらわさなかつた。金銀島はまさに人間の欲望と理想を未知の土地に仮托したものにすぎなかつた。

そして北太平洋はたちこめる“*Northern Mist*”の彼方深く閉ざされていた。

### 三

ゲーテの詩にも謳われているように、北方にも理想国があると信じられていた。紀元前四世紀にマッシリアの住人ピュテアスが発見したといわれる北極圏の記載を伴う *Thule* がこれであり、二世紀の *Ptolemaeus* に図記される *Thule* もこの北方のさいはての国に他ならなかつた。<sup>⑨</sup>

しかし、ローマ帝国を分解せしめたゲルマン人の侵入やスカンジナビア人・フィン人・アラビア人の侵寇は地中海沿岸全域に及び古典文化を継承する諸学派を分散させ、その文明を破壊した。いわゆる民族移動の波はややおくれ

た北歐のノルマンにも及んだ。彼等のなかにはスコットランド北方の島に定着したものや、ノルウェー最北端の岬を廻つて白海に入り、ドヴィナの河口に達したのもあつた。またワドッドというものは八六五年にアイスランドに、エリック赤王は九八五年にグリーンランドに達し、一〇世紀以後には北米北東岸の *Markland* (ニューファウンドランド) や *Vinland* (セントローレンス河口附近) に到達した。<sup>②③</sup>

北極地方に対する興味が復活したのは、アメリカが発見され、ヴァスコ・ダ・ガマによるアフリカ廻航やマガリヤンスによる南アメリカ廻航にもとづいてアジアへの海路が開かれて後であつた。一六世紀における西歐人の最大の魅力は *Catly* と香料諸島の有名な富源であつた。<sup>②④</sup> 当時、南方ルートによつて海上権を掌握していたイスパニア・ポルトガルは直ちにこのルートによつてアジア貿易を占有したが播籃期にあつたイギリス・オランダの海上勢力は劣勢を認める限り南方ルートによつてアジアへ出ることは不可能であつた。一四九七年の *John Cabot* の航海も東方の市場へ達するには北大西洋から北米を北へ廻航するのがよいというアイデアに基づいていた。カボットの息子 *Sebas-*

*tan* は西方への北方航路とは反対の方向即ち、北東に航路を求むべきであるとし、一五五一年に多くの政治家・実業家の賛同を得て、*Muscovy Company of Merchant Adventurers* を設立し、*Sir Hugh Willoughby* を指揮者として三隻の船を北東航路の探究に派遣した。しかし、漸くコラ半島に達したもののその年の冬営によつてウィロビー及び七四名の隊員の死亡に終つた。だが、その中の一船に乗組んでいた *Richard Chancellor* はドヴィナ河口で越冬して、翌年モスクワ公国との間に友好的な関係を樹立することに成功し、白海航路がはじめて開かれたのであつて、その後ながく英露の通商に利用されるに至つたのである。<sup>②⑤</sup>

ロシアとの通商を確立した後に至つても、モスコウ会社はアジアに至る北東航路の計画を放棄しなかつた。一五五六―七年、*Stephen Borough* はその弟 *William* と共に小船を以て大胆にもカラ海に入り、遂に立往生の形となつた。その後、この企てはロシア貿易に対する大きな期待と増大する北西航路への関心によつて阻げられはした。しかし、アジアの北にある可航水路への信念は、ローや *George*

Best などの地図に示されるようになお生きつづけていた。

一五八〇年頃、Mercator は Richard Hakluyte に対し  
 づ、「The Voyage to Cataio by the East is doubtlesse  
 verie easie and short」といふ送つてゐる。同じころ、

一五八〇年 Muskovy Company によつて派遣された二船  
 によつて William Pitt と Charles Tackmann がカラ海  
 に達してゐる。こうして繰返された数回の探検の後、北東  
 航路の通過が極めて困難なことを認めたモスコウ会社はそ  
 の活動の範囲を白海通商に限定するに至つた。以後、北東  
 航路探求のイニシヤチーフはオランダの手に落ちた。オラ  
 ンダは極東への関心において決して英国に劣るものではな  
 かつた。

一九五四年 William Barents によつて指揮された一船  
 は Novaya Zemlya の北に通路を求め、その西側を北緯七  
 七度まで航海した。彼はその後、再度にわたつて北東航路  
 の探検を行い、遂に一五九七年 Novaya Zemlya の冬营地  
 からコラ半島への帰航のボートの上で死亡した。バレンツ  
 の死後、一六〇五〜七年 (Henry Hudson)、一六二五年  
 (Cornelius Basman) などが、それぞれ探検を試みたがスピ

ッベルゲン及びカラ海に達したのみで失敗した。

そして、その後約半世紀、北東航路の探究は中絶するこ  
 ととなつた。

一方、モスコウ会社はこの方面に対して最後の努力を傾  
 けようとしていた。当時、オランダの捕鯨者たちはかなり  
 この方面の海域で活躍してゐたのであり、Novaya Zeml-  
 ya の北と東の開かれた水路がしきりと報告されてゐた。

一六七五年、オランダから達した噂によつて、英国の北東  
 航路へのスペキュレーションは復活した。④ 当時の地図がこ  
 の水路の想像された地理を示してゐる。そして、この地図  
 の著者 Joseph Moxon は Royal Society に対して建議書  
 を提出してゐる。そして、またまた北東航路の可能性が追  
 求されはじめた。John Wood はこのような発見事業の利  
 益を次のように述べてゐる。「北東は最短ルートを提供し  
 ている。それはわずか六週間の航海で、日本や今や英国の  
 大きな滞貨となつてゐる布帛のための市場へ達しうる」と。  
 Wood の試が Charles 二世や York 公によつて支持され  
 たのもまた当然であつた。⑤ 一六七六年五月二隻の船が出港  
 したがその航海は失敗し、一隻は Novaya Zemlya の西

岸で沈没した。こうして一〇〇年以上の間、カボット・ウイロビー・バロウ・ウッド等の英国側の試も、バレンツの三度にわたるオランダ側の努力も、この航路の征服に何等の実績も示し得なかつた。西からこの仕事を完遂しようとする西歐人の試は挫折した。今や先達を勤めるのは漸く統一に成功しつつあつたロシアであつた。そして以後二〇〇年、この国が欧亜北極地方探検の主役となつたけれども、陸上及び太平洋における成功にも不拘、遂にその努力は実らず、一八七九年に至つて、Nordenskiöld の手によつてはじめて完全に達成されたのである。<sup>⑤</sup>

この北方への航路の啓開は英国の国内事情にとつて、重商主義政策による国外市場の狭隘化と国内市場の独占化・統制化の緩和を期待するものであつたといふ<sup>⑥</sup>。そしてまた、北方航路の副産物ロシア貿易はロシアより原料をはこび出し、工業製品を輸入せしめて、ロシアの植民地化をはかろうとするものであり、さらにロシア商人を利用して彼等の従来の販路であつたボハラ經由のペルシア貿易やキャフタ經由の中国貿易まで支配しようとするものであつた。<sup>⑦</sup>

そして、このような經濟的背景があつたとはいへ、北方

航路の追求には基本的な二つの前提条件が必要であつた。それはひとつは極地とユーラシア・アメリカの両大陸をつなぐ陸橋の存しないこと。また他のひとつはアジアとアメリカが海峡によつて隔てられねばならないことであつた。一五〜一六世紀には、地図投影法としての Polar Projection が出現するとともに、この二条件を満足せしめるような陸地の輪廓を示している。当時の人々の全智全能の力を傾けつくして、なお北方航路の成功を祈るかの如くに。

#### 四

一六世紀から一七世紀の地図の多くが、アジアとアメリカの間に一海峡をえがき、さまざまな形態を有するこの海峡に、アニアンという名を与えている。例えば Mercator (一五六九) や Ortelius (一五七〇) の地図はこれを *Stretto di Anian* と記載しており、また Hondius (一六〇六) には *Anian fretum* などと記入されている。アジアがその北東においてアメリカと連接しているかどうかは近世初頭以来の地図家の重大な問題であつた。そしてまた、何時、誰がこの海峡を発見したかを何人も確信を以て解決し得なかつ



たのである。

最初にアニアン海峡に関する想像を地図に取入れたのはイタリアの地図家 Gastaldi であつた。ガスタルデイの北太平洋は同一作者にも不拘二通りに描かれている。即ち一五五六年の彼の地図にはアジアと新大陸の連結が示され、北方深く一大湾が形成されてその奥深く三角形の小島が存在する。しかし一五六九年の地図ではこの湾を南北に切通し、アニアン海峡を記している<sup>⑧</sup>。ガスタルデイ以後、「アニアン海峡」は地図家にとつて共通の名称となり、ペーリング海峡発見（一七二八）の後もおおしばらくその名は使用されてきた。このガスタルデイの地名記註が、Marco Polo の地名にもとづくことは Nordenskiöld, A. E. の研究によつてすでに明らかにされている<sup>⑨</sup>。Anian という名称がマルコポーロの記す Ania に由来してゐることはいくつかの研究をみても疑い得ない。

マルコポーロ旅行記の初期の出版物である一五五九年の Ramusio テキストの第Ⅲ巻は Ania についで、「Zaitun 湾を後にして、最初は西の針路をとり、次いで一五〇〇哩を航行すれば Cheinan 湾に達し得られる。この湾は北に向つ

て航海すれば一ヶ月を要する程の長さを持ち、その東南側においては Manzi を洗つてあり、また反対側では Ania, Coloman その他いくたの地方を洗つてゐる。この湾には無数の住民が住んでゐるがいずれも人口稠密である。さらに島嶼には砂金が多く、住民は河口附近の海岸で拾ひ集めてゐる云々」と記されている<sup>⑩</sup>。

この名称は Yule, Sir H. は Anin とされ<sup>⑪</sup>、また Charignon, A. J. H. は Amu と誌してゐる<sup>⑫</sup>。Cordier, H. によればこの名称は Amu, Aniu, Ania など種々類同のものがあり<sup>⑬</sup>、中村拓教授の示されてゐるように、Gastaldi が Ramusio 旅行集に記されてゐるこの地名の不明瞭な処から中国の南部（馮承鈞によればおそらくは雲南省臨安府附近）と推定されるものを誤つて北方へ置いたものと考えられる<sup>⑭</sup>。率直に云つて、巨大な Cheinan 湾とか、Anin や Colomen の国などというものは適確な比定は困難である。Anian という名称はアジアとアメリカを隔てる海峡に結びつけられてはゐるものの決して合理的な根拠によるものではなく、北東アジアの輪廓が不明なために附会せられて生じたものにすぎなかつたのである。

しかしその影響は極めて大きく、一六〇二年の Matteo Ricci の「坤輿万国全図」にもこれは「亜尼俺海峡」と記されている。

しかし、一つの問題、即ちアジアとアメリカの間の海峡が地図に記入されるためにはただ名称だけに限らず、陸地の輪廓という観点からもう一度考える必要がある。

北アメリカの西岸をメキシコから北上した一六世紀前半のイスパニア人の探検隊が達した北限は北緯四一〜四三度であつて、この海峡に関する情報を原住民から得られる位置にはなく、この点に対する期待は先ず望むことは出来ない。そこで、新大陸発見前後の世界地図を検討してみる必要がある。一五世紀末の作とされる Martin Behaim の地球儀や、Toscanelli, Fram Mauro の地図、また一五・一六世紀のプトレマイオス系の地図、さらには中世から近世にかけてのイスラム系の地図は例外なく、アジアを東のはてとし、その外側に東海を記している。一五〇七年の Waldseemüller や一五二一年の Stobnicza の地図は新大陸を示す初期の地図であるが、赤道附近に新大陸が描かれ、アジアと新大陸の間の北緯二〇度附近に日本が示され、アジ

ア大陸北東部は北から南東へ傾く線を描かれ、回帰線附近で西へ経度三〇度ほど延びた後に南下し、地名はマルコポーロに対応するものがかかり含まれている。

そして、アメリカを示す初期の地図はいずれも西から東へ新大陸の知識が延びて行くことを明瞭に図上に示している。ガスタルデイの地図が、同一作者にも不拘、両大陸を連結したり切断したりしていることは、それ自身この関係の明瞭でないことを示している。

一六世紀初頭の極投影法の出現は、北を通つて北大西洋から太平洋へ出ようとしたあの執拗な航路発見の努力と極めて近い関係を有している。そしてその距離的合理性は今日航路ならぬ航空路として S. A. S. によつて利用されている。そして、この正体不明の海峡は、おそらくは北廻り航路追求の熱烈な希望が信念にまで固成し、この未知の土地に通過しうべき水路を開かしためたものではあるまいか。

## 五

北東アジアの未知の土地の解明にはコサックの東進にもとづく地理的知識が大きな土台となつている。

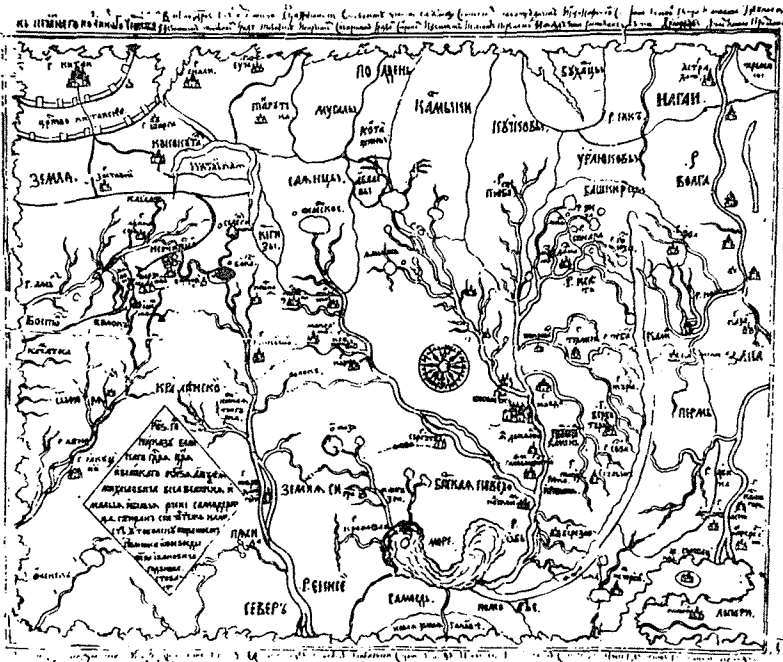
一五七八年に始まるイェルマクの東征以後、約五〇年にしてロシア人は待望の東海を望見した。

一六三九年の Dmitri Kopylov 麾下のロシア人 Ivan Moskovitin の Uya 河口への進出とそれに続く、Tany 湾岸の Uda-Amur 両河口間の航行、また、一六四三年に始る Vassili Poyarkov の Zeya-Amur 河經由のオホーツク海航行、さらには、一六四七年の Stadukin の Kolyrna 河經由 Anadyr へ至り、Penzina 岬を廻りて Giziga 河を越え、海岸に沿って Tani から Okhotsk へ至る旅行などによつて、一六三九年から一六四七年の間にロシア人はオホーツク海岸一帯を Amur 河口から Penzina 岬まで探検した。<sup>⑧</sup>

一方一六四八年六月二〇日、ロシア人 Semen Deshnew が Kolyrna 河から東へ出帆し、アジア北東端の岬を廻りて航行し、命名以前の Bering 海峡と附近の二島を発見し、Anadyr 河口で難破したという記述も知られてゐる。これは有名なシベリア史の著者 Müller, G. F. によつて記されており、若しこれが事実ならば Bering 以前にこの海峡を発見した最初の記録となるわけである。しかし、これに関

しては Golder, F. A. の有力な反論もあり、また Golder に対する駁論も Berg, L. S. によつて試みられており興味深い問題ではあるが、本稿の趣意と必ずしも一致しないのでここには触れないでおく。<sup>⑨</sup>

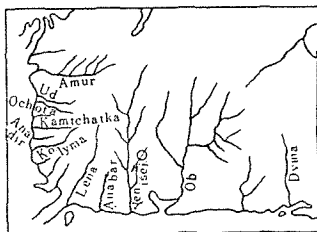
こうして一七世紀の中頃には東シベリアの状況は次第に明らかになりつつあつた。一七世紀のシベリアの開拓者達は自分達の訪れた土地の地図を行政管理当局者へ提出せねばならなかつた。モスクワからの命によつて、Tobolsk の知事 (Voevoda) Peter Godunov はこれらの材料を利用して、同地でシベリア地図を編纂し、印刷した。この最初のロシア人による印刷地図 “Chertezh Sibirskiya Zemli” は一六六七年に刊行された。この地図の実際上の製作は Bagrow, L. によると当時トボルクにあつて Godunov と親密であつた年代記作家・地図家として著名な Semen Remezov の父 Ulian Remezov の手で行われたものと推定されてゐる。この地図は故 Bagrow, L. によつて所蔵され (第1図)<sup>⑩</sup>、またいくらか簡単にされた写本がレニングラード・ストックホルムなどの図書館に収蔵されている。いま Bagrow の図をみると、上を南とし、南東北を海に開



第1図 Godunow, P. の地図 1667  
(IMAGO MVNDI, MCMLII より)

まれる方形の大陸を描き、南東部に二重の城壁を記した Cathay があり、北流する河川には Olenek・Yenisei・Obi・Dvina などが描かれており、なかでも Obi 川は地図の中央部に六本の大支流を有して大きく描かれ、北の海に望む大湾に注いでいる。また、やや北に向うが東流する河川には南から Amur・Kamchatka・Lena などの諸川が描かれている。

この地図は一六七二年に小部分が改められ、「Spisok s Chertezha Sibirskiya Zemli:」と題せられ、中国風の体裁で描かれ刊行された。④  
そして、このタイトルの下には一六八九年以前と推定される「アムールなる大河の物語」の記述や、Sakhalin 島に関する初期の記載が看取される。しかし、一七世紀末から一八世紀初頭にかけての極東に関する知識は、それ以後、モスクワにおいて、Semen Remezov によつて一六九八〜一七〇一年の間に印刷された「Chertezhnaya Kniga Sibiri」にさらにはつきりと具象化され

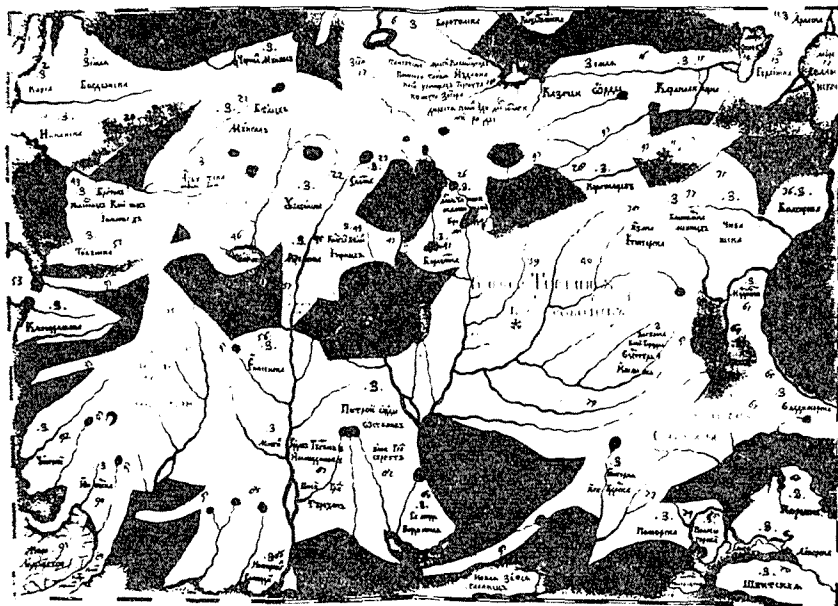


第2図 Remezow, S. 1698

(ウ)川河口の対岸に位置し、また「Japonia 島」や「Korea」が記され、さらに通常 Lena コーナリーといわれる北東隅に北東に伸びる細長い二つの岬が氷の海へ突出している<sup>⑭</sup>。またこの第二三図はシベリヤ最初の人種分布図として注目される。その陸地の輪廓や図の特徴はカムチャッカが半島で(第3図のNo.53)示されるのを除けばほとんど第二一図とちがわず、この氷海へ突出する岬も同様とみられる(第3図)。

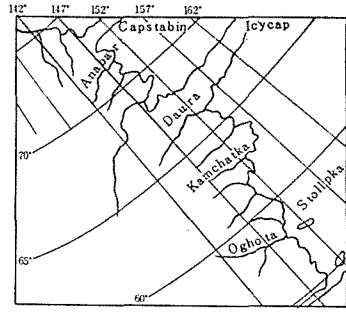
この岬はヨーロッパの地図においては Blauen-Ho-mann・Ortelius などの一六世紀の地図には見出すことが出来ない。しかし、一六八七年の Wisen, N.

ていた。その中の、第二一図「Chertezh usekh Sibirskikh Gradovi Zeml」と題される一六九八年の地図(第2図)には前述の二図に示される知識のほか、さらにカムチャッカが島として Uda



第3図 Remezov 地図帳の第23図

(Baddeley, J. F., Russia, Mongolia, China 1919 より)



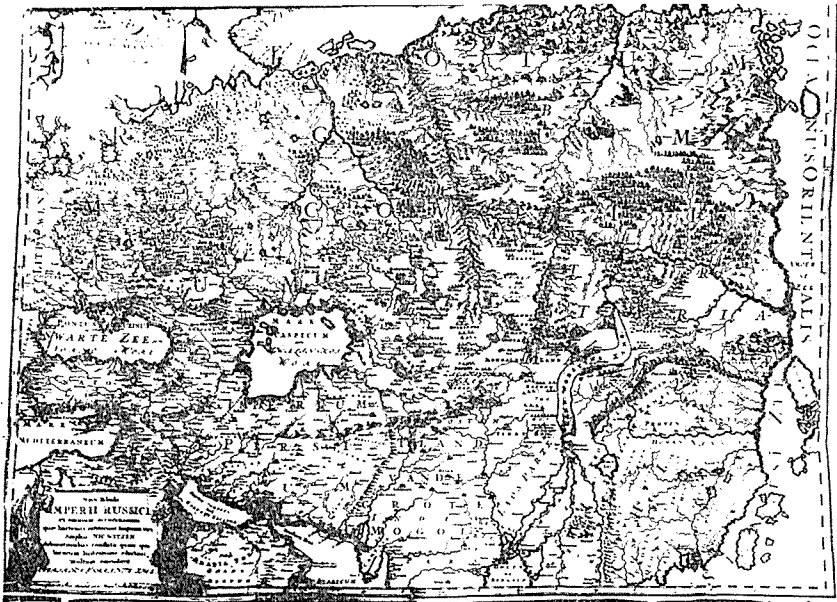
第4図 Witsen, N. 1687

の地図(第4図)にはいくらか共通する要素を有する突出部が存している。

また、Ides, E. I. の一七〇四年の地図(第5図、この地図は一七〇四年にオランダで刊行され、さらに一七〇六年にロン

ドンで再び出版された。)では、陸地の輪廓はおおむねトボルスク図に、また南部の太平洋沿岸島嶼の記載はモスクワ図と共通する。そしてこの地図の独自の特徴としては、東岸の北部、後にカムチャッカ半島が記されて来るあたりに数多くの小島から成る群島が記載されている。

これらの初期シベリア地図は前述の Witsen や Ides の他、一六六七、一六七二年に Palmquist, E. また、一六八八〜八九年に Kroneman, F. Prütz, K. J. など、さらに一六七八年以後、Müller, A. Spartenfeldt・Spatharios・Thomas, A. などによって筆写されている。



第5図 Ides, E. の地図 1704 (天理図書館蔵)

ところで、これらの初期シベリア地図が、その構成要素として水系を基礎としていることは一見して判断することが出来る。コサツクの進出が、いずれの場合も水系より水系を伝つて前進したことから当然推測することが出来るのである。しかも、コサツクの知識は河川流域の原住民の知識にもとづくものであつたに違いない。Droberによつて記される有名なエニセイ土人の地図の如き知識が、原住民よりコサツクへ伝えられたものであらう。するとドイツの貴族出身で流寓してコサツクの頭目となつた Bejton, A. のアムール川流域の地図などは恐らく、このような原住民の知識にもとづいてつくられたもので、レミョゾフの *Malaja Chirchznaja Kniga* に貼付されており、これら初期シベリア地図の材料とされたものである。<sup>④</sup>

むしろ、これらの水系中心の地図が材料とされたにちがいないが、それらを纏める陸地の輪廓は別に考えてみる必要がある。

Nordenskiöld, A. E. の *Periplus* をみると、ヘジラ後一〇〇九年の記載を有するアラビア人の描いたイタリヤ系の *Portiano* 型の地図がある。<sup>⑤</sup> これは地中海から北東アジ

アをふくみ、北は北極海から、南北アフリカまでを包含する。この東半部が、きわめて、初期シベリア地図に近い図形を有しており、しかも、ともに南を上にしてゐる。

ヘジラ後一〇〇九年といへば一六〇〇年或は一六〇一年であつて時期からみても初期シベリア地図との関連を考へるに不合理ではない。さらにこのポルトラノ型のアラビア地図の図形に近いものが、ポルトラノ型式を伴わないアラビア地図のなかにも存している。一五九二年の年記を有し、Miller, K. によつて彩色されて複製された Oxford 所在の地図がこれに当る。<sup>⑥</sup>

これらの図型はさらに Idrisi の一一五四年、及び一一九二年の方形図にその源流を求めることが出来る。いま、一一五四年図の経度 IX、X、緯度 V、VI、VII、でカヴァーされる範囲（アジアの北東隅に当る）をみると、北に Diebel Kutata なる東西につらなる山脈があり、これが経度 IX、緯度 VII から東南に延びてアレクサンダーの城壁となつて経度 X、緯度 IV に及んでゐる。<sup>⑦</sup> そして、このアレクサンダーの城壁の外には *Madjudi, Jadjudi* なる悪霊が記されている。アレクサンダーの城壁はアムールの流域に始まり、*Djebel*

Kufala に到り、その中央に大きな門を有している。Miller

によると、Djebel Kufala やこの城壁はいずれも現実的な地理的認識の限界を示すものとされ、ほぼアルタイ—サヤン山脈の線とされ、さらに、東はアムールに延びるとして S. g. Remezov の地図 (一七〇二) のアムールの北岸には、

「ここまでマケドニアのアレクサンダーが来て武器をかくし鏡を埋めた」と記している。とすればはるか東のアムール流域まで延びるアレクサンダーの城壁と何らかの形で関連を有するものと思わねばならない。コーランのメッカ啓示のなかに、アレクサンダーが「陽の昇る処に辿りつき」、また北のはての「聳え立つ二峯」の間に辿りつき、「ヤージュージュ、マージュージュ」を防ぐべき防壁を「火と燃える鉄塊」でつくる話がみとめられる (井筒俊彦訳『コーラン』中一三〇、一三二頁)。そして Ibn Khordadbeh の「ヘダヤ商人とロシヤ商人の路程」に関する記事を見ると、イラム世界とはるか西北、ドン・ボルガのまだ先のスラヴの地との交易が詳細に記されている。この記事は九世紀のものであるとしても、その後、完全に交渉が断絶したのもとも思えないのであつて、地理的知識もこの間に交流がみ

られたことを傍証するものと思う。

昨秋 Walter Fuchs 博士は筆者の初期シベリヤ地図の源流についての問に対して、「はつきりとはいへぬが、カトローニア地図と似ているのではないか」と答えられた。

筆者はいま、初期シベリヤ地図の源流を、一つは原住民の水系図、一つはこれを統合するものとして、西アジア・地中海系の知識を指摘しようとしているのである。

一七世紀末の初期シベリヤ地図には前述した Deshnew の発見の結果を全く見出すことは出来ない。当時要求されていたアジア北東部に関する最新の地理的知識たりうべき Deshnew の事蹟が完全に無視され、漸く Muller の紹介によつて世に出たことには若干の疑問なきを得ない。ところで初期シベリヤ地図はカムチャッカ半島の記載がきわめて不十分である。すでに一七世紀の中頃原住民によつてカムチャッカの情報に齎されていたが、カムチャッカがはつきりとロシヤ人に知られるに至つたのは一六九七年の Vice-admiral Atlasov の探検以後である。彼は隊を二つに分け西岸と東岸を進み、ついに北緯 52° 10' の Golynina 河口から海上はるかに島とおぼしきものを望見した。これによ



つてカムチャッカは完全にその姿をあらわしたのである。<sup>②</sup>

千島の発見は一七〇六年、Michael Nasedoskin の Lopatka 岬到達の時に海峡をへだてた反対側に陸地の存在を  
確認したことに始まる。この報告が Yakutsk に達すると  
直ちに一七一〇年九月「航海に適する船をつくり、徹底的  
に海峡の彼方の陸地を調査し、海図上に記せ。」という命  
令が発せられた。これによつて、翌年八月 Danila Antsi-  
ferov と Ivan Kozyrevskii が Kamchadal Nos に至り  
ここで小船に乗つて千島の第一島、即ち Shumshu 島に達  
し、更に Paramushir に行き、一七一七年九月に、彼らが  
訪れた島々の海図を携えて Bolsheretsk へ歸つてゐる。  
彼等はここで Kuril やカムチャッカ沿岸に漂着した日本人  
に會つて話を聞き、クリールの北部三島にのみ上陸したた  
けにも不拘、千島全部、それに、松前、本州北半まで描い  
てゐる。<sup>③</sup> この Kozyrevskii の探検の結果は「わが國」"She-  
stakov の地図"が比較的忠実にその報告に従つてあり、  
Golder も、その頃は Shestakov は Kozyrevskii の報  
告に忠実であることを推定してゐる。<sup>④</sup> この Kozyrevskii  
の報告は一八六九年刊 Petersburg の水路誌に原文のまま

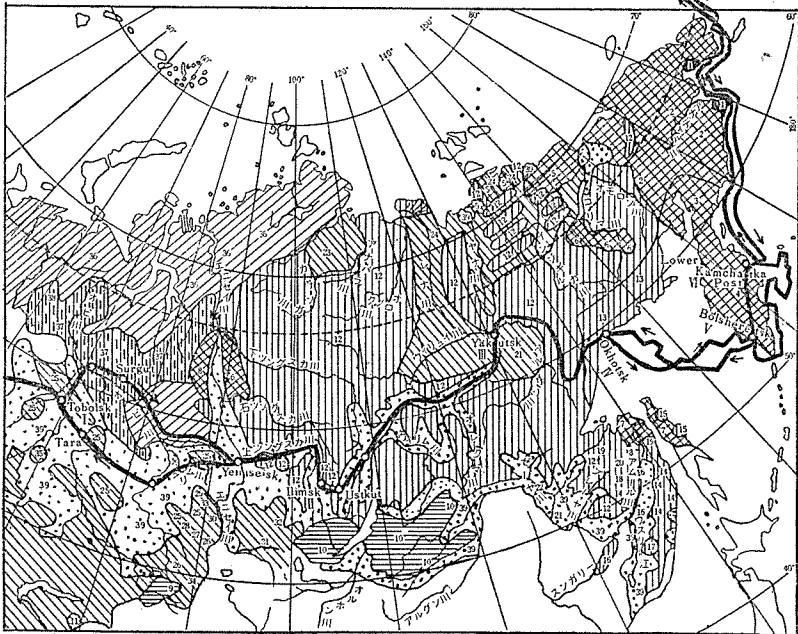
掲載されており、これは千島・北海道・本州に関するロシ  
ヤ最初の記事であるといわれている。<sup>⑤</sup>

## 六

Müller の記すニサツク、Deshnew 等のアジア北東端の  
一六四八年の廻航が Berg の意見のように支持されるとし  
ても、その科学的探検と記載の榮譽はやはり Bering に帰  
せられねばならぬ。

一七二五年一月六日、ピョートル大帝はみずから勅命を  
認め、老練な船長 Vitus Bering に対してカムチャッカで  
船を建造し、それを用いて「アジアとアメリカの大陸が何  
処で會つてゐるかを探るために航海すること」を命じた。<sup>⑥</sup>  
イェルマク以来のシベリアの経路も、その北東のきわみ  
が分明でない限り、完成されたとは云い難かつた。ペー  
リングは一七二五年二月五日に離京し、一七二八年三月に  
Nizhne-Kamchatsk に到着して直ちに「St. Gabriel」の  
建造を行い、六月八日船を進水せしめ、七月一三日にカム  
チャッカ河口から出港した。

途中 St. Laurence 島を発見して現在のベーリング海峡  
の水道を航行し、八月一五日には北緯 67°18' にまで達し



各地通過の日時

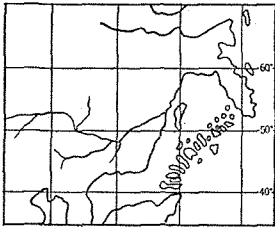
- Tobolsk (I) { 往 Mar. 16-Mar. 15, 1725  
復 Jan. 10-25, 1730
- Ilimsk (I) 往 Winter 1725-1726
- Yakutsk (II) { 往 Mid June-Aug. 16, 1726  
復 Aug. 29-Sept. 3, 1729
- Okhotsk (II) { 往 Sept. 30, 1726-Aug. 21, 1727  
復 July 23-29, 1729
- Bolsheretsk { 往 Sept. 4, 1729-Jan. 14, 1728  
復 July 2-14, 1729
- Lower Kamchatka Post  
{ 往 March 11-July 13, 1728  
復 Sept. 2 1728  
(Golder, F. A. による)

ペーリングの第1次探検、および第2次探検をふくむ大北方探検の地図は、校了直前被見した Atlas Istorii Geograficheskikh Otkritii i Issledovaniy, Moskva 1959 に詳細に記されている。この地図帳は、学士院会員、モスクワ大学教授で民族地図研究家のサリチエフ、太平洋発見史の名著を有するエフイーモフ等、この方面に関する最高のスタッフを揃えて刊行されたもので十分信頼に堪えうらうと思う。ここには資料として利用する余裕をえなかつたので一筆しておく。

北東アジアの人種・民族

- |    |    |         |    |   |
|----|----|---------|----|---|
| ■  | 1  | エスキモー   | 22 | マネギル  |
| ▨  | 1  | 古シベリア族  | Ⅱ  | トルコ族  |
| 2  | 2  | チュクチ    | 23 | ドルガン  |
| 3  | 3  | コリヤーク   | 24 | ヤクート  |
| 4  | 4  | イテルメン   | 25 | シベリア・タタール   |
| 5  | 5  | ユカギール   | 26 | テレウト  |
| 6  | 6  | チュヴアン   | 27 | クマンチン   |
| 7  | 7  | ギリヤーク   | 28 | シヨール  |
| 8  | 8  | エニセイ    | 29 | キヂル   |
| ▨  | Ⅰ  | 蒙古族     | 30 | サガイ   |
| 9  | 9  | カルムイク   | 31 | ソヨート  |
| 10 | 10 | ブリヤート   | 32 | カラガス  |
| 11 | 11 | ダウンガン   | 33 | カチン   |
| ▨  | Ⅱ  | ツングース族  | 34 | アルタイ  |
| 12 | 12 | 固有ツングース | 35 | キルギス  |
| 13 | 13 | ラムート    | Ⅴ  | サモエード族  |
| 14 | 14 | オロチ     | 36 | サモエード   |
| 15 | 15 | オロク     | Ⅵ  | ウゴル族  |
| 16 | 16 | ゴルド     | 37 | オステヤク   |
| 17 | 17 | ソロン     | 38 | ヴォグデル   |
| 18 | 18 | サマギル    | Ⅶ  | インド・ゲルマン族   |
| 19 | 19 | オルチ     | 39 | ロシア   |
| 20 | 20 | ネグダ     | Ⅷ  | (Buschan, I. Illustrierte<br>Völkerkunde i. d. Byhan,<br>A, にもとづく。) |
| 21 | 21 | ダウル     |    |   |

第6図 ペーリング第一次探検のルートと北東アジアの人種・民族

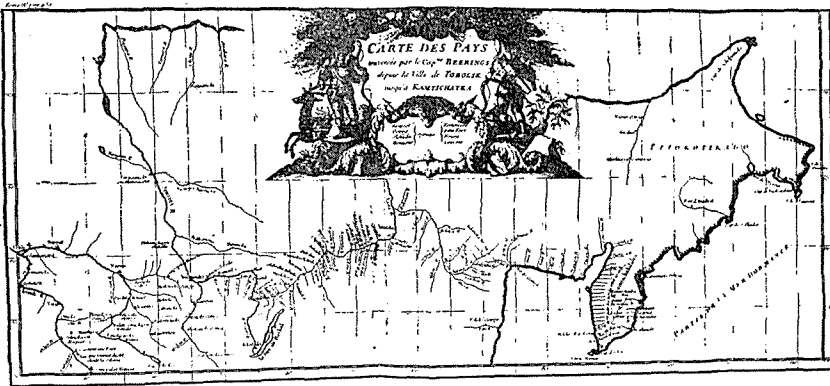


第7図 Kirillov, I. 1734

たが、その北方に土地の見えない事を確認して帰途についた。帰途においては St. Diomedé 島の発見を加えたが、アメリカ側の海岸は遂に望見し得なかつた。これらの結果をまとめた地図は一七三〇年五月、ペテルスブルグへの帰途にあつたベーリングから提出された。ベーリングの第一次探検(第二回カムチャッカ探検)の結果はカムチャッカとシベリアの東岸を北緯 67.18 まで明らかにしたこと、ウラルから Petropavlovsk に至るすべての場所の地理的位置を決定したことであつた(第6図)。

ベーリングのこの成果は一七三四年につくられた学士院地図部長の Kirillov, I. K. 著の "Imperii Rossiei Tabula Generalis" (第7図) に先ず採用された。一方、この結果

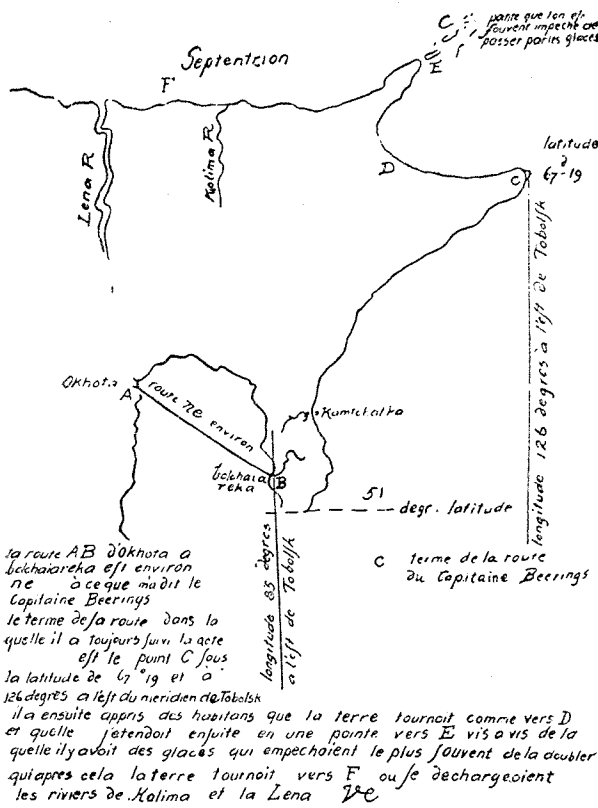
はただちにハリへもたらされたものように、一七三五年、当時編纂中のイェヌス会士 Du Halde の "Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de l'empire de la Chine et de la



第8図 Du Halde の中国誌第四巻に収められたベーリングの探検結果(宮崎市定先生蔵)

Tartarie chinoise, 4 toms. の第四巻の最後に一章を設けて記載された(第8図)。また、地図家の D'Anville の "Nouvel Atlas Général de la Chine... 1737" にも採用されたことが知られる。当時これらの探検の結果はすべて秘密に附せられて

おり、公式報告書の刊行される以前にフランスへ伝わったのは奇怪である。しかし、地理的事業や未知の土地に対する探検に深い興味を持つてゐた高官は Kirillov ほとんどただ一人であつたと云つてよく、他はすべて外人であり、しかも、これらの事業の指導者もほとんど外人であつた。



第9図 J. N. Delisle がバリへ送つたベーリング探検地図  
Delisle Manuscripts XXV 6 (Archives de la Marine)

この探検結果のフランスへの報知について、Golder はこの図がロシア政府からポーランド王に贈られ、ポーランド王が Du Halde に与えたとしており (Bering's Voyage, p. 362)、又、Bagrow は第一次探検の関係者の一人、学士院書記のフランス人地理学者、Delisle, J. N. によつて洩されたとしてゐる。②。この地図は現在バリの "Archives de la Marine" にある (Delisle Ms. No. XXV の 6) 図とされるが、筆者は厳密にこの図とは断定しえないが、この図乃至はその周縁の地図と解せられる様に思う (第9図)。

ベーリングの original chart は一九一四年 Bagrow によつた "Karty Asiatskoi Rossii, Petrograd" に採録されるに至つてはじめて陽の目をみた。この第一次探検の成果はもちろん前述したように大きな価値を存するものではあつたが、当初の命令、「アジア

とアメリカが何処で会おうか」についてのアメリカ側沿岸の地理的知識に関しては何等もたらずものはなかつたのである。

ペテルスブルグでは更にベーリングがアメリカ海岸を探索すべきであるという意見が提議され、大北方探検計画の一環として採用されるに至つた。

この立案はおもにキリロフの手になるものであつたが、この第一回學術探検とも第二回カムチャッカ探検とも呼ばれるシベリアの探検は、今日迄各国政府の行つたいかなるものも比肩し得ぬほど、大規模なものであつた。その活動範囲はアルハンゲリスクから日本に至る欧亜の海岸<sup>⑧</sup>であつたが、その他、各地方全般に亘る研究のために陸路で何度もシベリア旅行を行つた。探検隊が活動した地方の住民に非常に重い賦役が課せられ、全住民が窮迫にさえ陥つたといわれている<sup>⑨</sup>。ここで焦点を再びベーリングに合わそう。

ベーリングは Chirikov・Spanberg をおもな幹部とする総勢五七〇人の司令官に任命せられ、探検隊は一七三三年二月にペテルスブルグを出発した。

一七三七年夏、ベーリングの一行は苦難を極めたシベリ

アの旅を終えて Okhotsk へ到着し、一七四〇年六月には二隻の貨物船を進水せしめた。これらの船はそれぞれ “Sv. Petr” “Sv. Paul” と命名され、いずれも全長八〇フィート、積載量一〇〇トンの規模であつた<sup>⑩</sup>。一七四一年六月四日、ベーリング麾下の “Sv. Petr” とチリョフ麾下の “Sv. Paul” は Peterpavlovsk 港から出帆した。六月二〇日、両船は互に見失つてしまつたが、七月一六日北緯 38. 14° にあつた “Sv. Petr” はアラスカの St. Elias 山に当る雪に覆われた山稜を見た。そして岸に進む途中、現在の Kayak (59° 57' N) に達し、エスキモーに出会つてゐる。そしてそこから七月二二日に帰途につき、Tunanoi, Evdokiev 両島を発見し、Shamagin 諸島で碇泊し、船中で死んだ人々を埋葬し、Aleut 族と会ひ、北緯 51° で St. John 島に達した。一〇月二五日彼等は Aleutian 列島の Anchitka, St. Markian 島を見、翌日 St. Stephen 島 (Kiska) を一九日には北緯 52° 30' の Abraham 島 (Semich) を発見した。九月と一〇月は嵐に襲われ、十一月四日に陸地を望んだのがベーリング島であり、彼はここで壞血病によつて落命した。

前述した様に一七四一年六月

二〇日に北緯49。においてペー

リングとチリコフの乗船は相別

れたが“Sv. Paul”即ちChir-

kovの乗船は55°31'Nで陸地を

発見した。これはウェールズ岬

の北西に存するものであつて、

ここでコースは北に変えられ、

更に北緯59。において西に変え

られた。チリコフは帰途、Aleut

族の住むAleutian 列島の数島

を発見し、九月二一日、北緯

52。36'においてアリューシャン

列島の最西端Attuを見、一〇月九日、Petrovlovskに

帰港した。ペーリングの太平洋における探検の結果はペー

リング海峡のアメリカ北西岸(北緯55。30'~60。)、アリュー

シャン列島、ペーリング島などの発見と、麾下のSpanbe-

rgによる別働隊のオホーツク海・カムチャッカ半島・ク

リール諸島、日本の一部について調査などである。

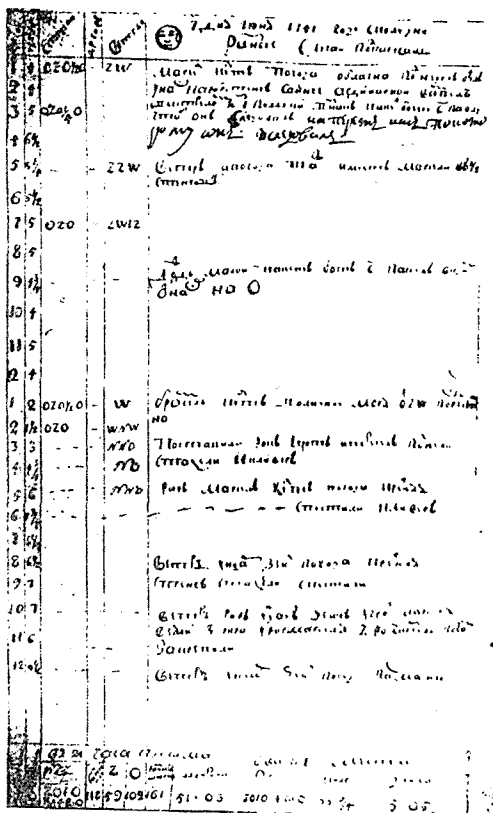


写真 Sv. Petr の航海日誌 1741年6月7日、各欄は左から、時間、ノット、風向、コースなどを示す(Golder, Bering's Voyage による)

当時、日本の外廓は西欧諸国やロシアにはきわめてわず

かしか知られていなかった。この時期の地図においては日

本の北部が Yezo となつており、その東に大きな Staten

Island, その東には実在せぬ巨大な Gamaland などが存し

ていた。Staten Island 即ち Itrup はオランダ人 Vries に

よつて、一六四三年に発見された。

一七世紀や一八世紀前半の地図においては *Yezo* に関する特殊な混乱が特徴的である。すなわち、一方ではそれはアジアと接壤するとなし、他はそれとアメリカとを結びつけ、また、どちらにも属さぬのはアジアとアメリカの間にある巨大な島としてゐる。Strahlenberg（一七三〇）の地図ではカムチャッカと同一視されている。

ロシア学士院の天文・地理の学者 *Delisle, J. N.* は一三二二年に上院の要請に答えて、ペーリングが第二次探検の案内のために持つて行く地図を編集した。この地図はカムチャッカ半島を中心とするアジア大陸北東岸に關しては当然ながら第一次探検の結果正確になつてゐるが、周辺諸島及び対岸の大陸に關しては多くの誤を留めてゐる。即ち、この地図には北緯48°に、巨大な *Company Land* (*Kuril* 列島の一)、*Vries* は一六四三年に45°N~48°Nとした)を、さらにその北西にポルトガル人 *João da Gama* が発見したと伝えられる *Gamaland* を記してゐる。彼はこの土地をはるか東につらなる大半島の先端とみたのである。そして、これらの虚構に類するものがすべて消え去つたことはペーリングの第二次探検の最大の賜であつた。

ここで、別働隊 *Spanberg* の一隊の行動に触れる必要がある。彼は一七三九年五月二日、*Bolshereisk* から日本に向けて航行し、六月一六日北緯39°で日本を望見し、沿岸を南下して六月二二日北緯38°20'で碇泊し、船を訪れたものから情報を蒐集した。又同年 *Spanberg* の副長 *Walton* は日本の海岸へ航行を行い、北緯35°10'（陸前、田代浜）において七人の部下を上陸せしめ、更に六月二三日には北緯33°30'（安房の海岸）に達して引返し、*Bolshereisk* へ帰還した。この訪問は元文世説雜録や北海島船記に記されてゐる。一方、一七四二年、他の *Spanberg* の部下 *Schelling* は北緯50°10'の *Sakhalen* の東岸 (*Land Yesso*) に達した。そして岸から六マイルの距離を保ちながら、見え隠れする海岸にぞうて *Laperouse* 海峡北緯45°34'まづ南下した。

この *Spanberg* の一隊の功績は次の様に要約し得よう。彼等は千島列島と日本の一部を調査し、実在しなす *Gamaland* を *Spang*、*Vries* によつて *Staten Is.*, *Company Land* と呼ばれたものが他ならぬ千島列島の二島であることを示した。そして最後について北からの日本への航路の発見に

成功したのであつた。Spanberg や Walton の Survey Map に基づいて、一七四五年のロシア学士院地図は描かれてゐる。そこには Amur の河口から Sakhalen、日本の一部、Kurile 列島、カムチャツカ南部がはつきりと示されてゐる。そして、サハレン及びアムール河口に関しては中國の所謂康熙図の図形、即ち瑞雲型のサハレンとその周辺との關係が明らかに示されてゐる。前述した Du Halde の“Description”が D'Anville の手によつて、康熙圖の知識を採用してゐることから考へて、この圖のサハリンに關する二葉の知識がとり入れられてゐることが明らかになる。その後、この知られることのすくなかつた海域は一七七六年の Cook, J. の第三回航海、一七八五年の Lapérouse の航海、一七九五、九六年の海圖の作製を目的とする Bronghton の航海、一八〇四、五年の Krusenstern、一八六五年の Neverski の航海によつて漸次明らかになつて行つた。

## 七

すでに見たように、一七世紀のロシアが有した北東アジア

アに關する地理的知識は原住民の情報を基礎としたロシアの報告に基くものであつて、その東のきわみは漠然としたものであることを示してゐた。

当時、シベリアの地理的認識を確実にするにはイルクーツク・キャフタ經由の中國貿易路を確保する前提でもあり、商業資本主義の勃興期にあつたロシアにおいて最も利潤の大きい貿易品は他ならぬシベリアに産する毛皮であつた。そして、この未知の北東アジアへの探究はまた一面において、この地方の富源に対する商業資本の進出をも意味し、それは後の露米会社の設立（一七六八年）につらなる一連の活動でもあつた。あのコジレフスキーの報告を読んだピョートルの脳裡を幻想的な金銀島の伝説がかすめたといわれるのも、單なる金銀への欲求だけでなく、重商主義的な社会的背景の反映であつたかも知れない。

ロシアは東方への進出過程において黒龍江沿岸においてはじめて中國人と接觸した。これはロシア人がウラルを越えて始めて遭遇した火器を有する國民であつたという。そして、若干の曲折の後に條約が結ばれ、通商使節が派遣され、ギリシア正教の伝道団が北京に駐在してロシアの外交



団を兼ね、それは学士院に東洋語学部が設置されるまで、唯一の東洋語研究機関となつたのであつた。そして、この中国こそ、康熙帝の治下にあつた盛時の清朝であり、一部のイエズス会士によつて、すぐれた国家組織と高い文化を注目され、学問愛好の君主の統治する国として西欧に伝えられていた。⑤ こうして、一種の中国ブームが西欧に捲起つたのである。当時のヨーロッパ最高の知性ライブニッツも、熱狂的な中国讚美者の一人であつた。彼は普通学、普通教会などの高い目標を持つた文明批評家、哲学者であつて、ヨーロッパを中国によつて洗煉し、近代化すべきであると考へ、中国とヨーロッパの文化交流をはかるために、一方ではイエズス会を利用し、他方では外遊中の年若きロシア皇帝たるべき人にそれを期待した。いかなる国の王にも妨げられずにこの計画を実現しうるピョートル一世（一六七二—一七二五）に対して、彼は二つの要望を云い送つた。

それはひとつは北東アジアの地理的知識を明らかにすべく、アナニアン海峡問題をふくむ探検隊の派遣であり、もうひとつはペテルスブルグにアカデミーを建設し、信仰・科学・貿易を一体として、これによつてロシアが世界

の文運を促進する任に当ることであつた。⑥

そして兎も角、アナニアン海峡問題解決のための探検とアカデミーの建設はピョートルの死後ではあつたが実現した。ピョートルからそれに続くエカテリナの時代はモスクワ國家が急速に近代化し西欧化した時代であつた。スラブの國家制度も教育制度もいちはやく宗教的色彩を脱しつつあつた。一七〇〇年にモスクワに建設され、一七一五年にペテルスブルグに移つた後の海軍大学、数学・航海学校の開校や、一七二五年一月のアカデミーの設立、一七二五年のモスクワ大学の創基など、もちろんロシアの經濟的・軍事的自立を達成する計画の一連のものであつたとしても、それらはツァーの行つた科学に対する大きな貢獻であつたことを否定し得ない。⑦

地理学の部門では、はやくも一六五〇年には、かのニヒトンがケンブリッジの講義に採用したといわれる *Vall-enius* の *Geographia Generalis* がオランダ語からロシア語に翻訳されていた。

すでにピョートル一世の時代にカスピ海地図がつくられ、またベーリングの探検が準備せられた。ベーリングの第二

次探検はさらに大北方探検の一環として組み入れられ、アルハンゲリスクからチュリノースキン岬に至る北極海沿岸の探検とともに学士院がこれを指導した。一七三九年、数学者 Euler, L. の提案で学士院に地理部が設けられ、一七六六年の地図局開局によつて地理部が閉鎖されるまでその事業を継続した<sup>⑤</sup>。ロシアの地理学・博物学研究は一八世紀の中頃からエカテリナ二世（一七六二—一七九六）の治世にかけてとくに活潑に行われた。ペーリングの第二次探検を包含する大北方探検において、陸上の総指揮は博物学の Gmelin, J. G. (1709~1755) (ドイツ人) が行ひ、天文学・

地理学の DeLisle de la Crouaère (一七四一—一七四二) (フランス人)、植物学の Pallas, P. S. (一七四一—一八一二) (ドイツ人)、動物学の Steller, G. (一七〇九—一七四六) (ドイツ人)、歴史学の Muller, G. (一七〇五—一七八三) 及び Fisher, I. B. (一六九七—一七七一) (ドイツ人) など外国人学者がおもに指導に當つた。(うち DeLisle, 及び Steller はペーリング第二次探検に従ひ乗船した<sup>⑥</sup>)

しかし、このような状況のなかから、探検計画の立案や実際に探検に参加することによつて、次第にロシア人学者も

養成されて行つた。その代表をなすものがロシア科学史上最も偉大とされる才能豊かな Lomonosov, M. W. (一七一—一七六五) とドリールの門弟でまたステレルの助手であつた Krascheninnikov, A. D. (一七一—一七五五) であつた。ロモノソフはただ科学だけでなく、文学・芸術にも秀でていたが、地理に関する領域ではライエル以前にすでに地層・地史・進化を考えた業績をはじめ、気候・氷河など自然地理全般から地図・経済地理にまで及び、すでに地理学の方法として「比較」の問題すらとりあげている<sup>⑦</sup>。

またクラセニニコフはペーリング第二次探検に従つてカムチャッカへ行き、そこで前後して二人の師の死去に会い、彼らの業務を代行するとともに、有名なカムチャッカ地誌 “Opisanie Zemli Kamchacki, 1775” を著したのであつた。これよりさき、学士院はキリロフを中心として、一七四五年にロシア最初の真の意味での科学的地図を編纂した。この地図は六二の天文学的観測点を有し、ドウリールの特殊な円錐投影法によつて作られていた。この地図の完成はロシア地理学に劃期的な意味を有するものであつて、学士院地図部長のオイラーは「ロシアの地理学はこの地図の出現

によつてドイツの地理学より、はるかによい状況に立至つた」と述べている。

さらに、一七五八年にロモノソフが地理部長に就任してから、彼は鋭意、観測器具の整備につとめ、当時西ヨーロッパで急速に進歩しつつあつたこの方面の状況に即応する態勢をとるとともに地図の修正を行わせた。

アカデミーや海軍は尚いくつかの北東アジア・北極海沿岸の探検や世界周航を行った。

現在の全ソ地理学会（Vsesoiuznoe Geograficheskoe Obshchestvo）の前身、Russkoe Geograficheskoe Obshchestvo は一八四五年の設立である。これはパリ地理学協会の一八二一年、ベルリン地学協会の一八二八年、王立地理学会の一八三〇年に次ぐものであつて、学士院会員の Litke, F. P.（一七九七—一八八二）と Arseniev, K. I.（一七八九—一八六五）の指導のもとに組織せられ、初代会長にリトケが就



第10図 ロシア学士院地図中の北東アジア（1745）

任した。

彼はロシアの地理学的探検の代表的業績を有する地理学者であり、世界周航の経験を持つ数学・航海学校出身の提督であつた。彼の名前のつけられた島や岬や海峡は北極海から南海に至る広汎な範囲にいまなお見出すことが出来る。そして、彼の後を襲つて二代会長となつたのが、ベルリンでリッターの講筵につらなり、フンボルトと交渉を有し、みずからリッターのアジアの補遺をつくり、天山山脈の探検と研究を遂行した Semenov, P. P.（一八二七—一九一四）であり、彼の会長在任中にロシア地理学会は有名な Przh-



第11図 ロモノソフの地図帳の北東アジア (1776年刊)

valiskii, A. B. (一八〇一—一八七二)の中央アジア探検を支持したのであつた。<sup>⑤)</sup>

リトケのはかの、もう一人の設立創業者、Alseniev, K. I. はペテルスブルグ大学の経済地理・政治地理、当時の言葉でいえば統計学の教授であつて、一八二一年、数名の教授とともに無神論的革命思想を理由に解職された人であつた。その他、有名な言語学者・土俗学者 Dal, V. I. (一八〇一—一八七二)も熱心に地理学会の設立に参調した。

地理学会の設立発起人(全部で一七名)のなかにはロシアの地理学史において著名な人物が少くなかつた。前述の人々のほか、学士院会員で、動物学・地理学の Bell, K.M. (一七九二—一八七六)、学士院会員で、統計学・土俗学の Köppen, P. I. (一七九三—一八六四)(気候学のウラジミール・ケッペン之父)などがあつた。<sup>⑥)</sup>

一八四五年八月ロシア地理学会の会則が Royal Geographical Society の会則にならつて作製され、この会則によつて地理学会は四部門を設けた。すなわち、(1)一般地理学部(外国・とくに隣接諸国の研究)

(2) ロシア地理学部 (3) ロシア統計学部 (4) ロシア土俗学部  
よりなるものであつた。

一八四五年一月第一回の総会において会長リトケは新設された地理学会の事業に対する見解を次のように明らかにした。すなわち、「わが国はその距離においてほとんど地球の半分以上を占めるのであつて、このような距離に特有なところとして、多数の種族を擁しながら、氣候において、地球構造的諸關係において種々の差異を蔵している点では実に世界の特殊な部分となつているのであるが、その部分たるやまた比較的研究されていない部分である。このように全く特殊な条件をもつということはただちにロシア地理学会の主要な対象がロシア地理の研究にあるべきことを示すものである。……」とし、さらに続けて、地理学会の研究分野が従来、学士院で研究され、ロシアの地理学がこの学者層に負うところが大であつたこと、そして、地理学会がある特殊な目的を有する学士院の延長の様なものであるとした。<sup>②</sup>

一八四七年、ロシア地理学部は数理地理学部と自然地理学部の二つにわけられた。一般地理学部は間もなく廃止さ

れ一八四九年の会則によつて、数理地理学部・自然地理学部・土俗学部・統計学部の四学部によつて近年まで運営されて来た。<sup>③</sup>

一八四七年、ロシア地理学会は第一回探検隊を組織した。その目的は北部ウラル全部にわたつてヨーロッパとアジアの境界を調査することであつた。そして、除々にシベリアの再検討が行なわれ、一八五一年にはロシア地理学会シベリア支部が総督ムラヴィヨフの支持のもとにイルクーツクに設けられ、これを基礎に、一八五四年シベリアの学術大調査が企てられ、またシベリア支部独自で、ウスリー地方の探検が行われた。<sup>④</sup>シベリア年代史の著者シチュエグロフは一八五四年の項で次のように記している。「シベリアの研究事業に於ては地理学会の会員によつて、又同学会の資本によつて、種々の時代に行われし学術的調査と旅行に負うところが非常に大である。学会の出版の大半はシベリア学に献せられている。学界に名譽ある名声を博せし名士の大部分はかつてはシベリアに於て活動し、或は此の偉大なる地方の多方面の研究に援助せしことは注目し値する。」と。

(イ・ウエ・シチュエグロフ・吉村柳里訳『シベリア年代史』昭和

一八(原著一八八三)六八三頁による。事実また、かのチエホフの「シベリアの旅」にも馬車に揺られながら苦闘する地理学会員の姿が描かれており、彼らの業績をもとに「サレン紀行」の巻頭には流麗な筆致でサレンの地理的認識過程が記されている。「バイカルまでは散文だつた。バイカルから東には詩がある。」という彼の書簡の一節は地理学の世界にも相応すべき内容を有していた。

シベリア研究とともに北極研究も積極的に行われ、二〇世紀になつてそれは大きな輝しい成果を取め、もはや世界の他の追隨を許さない程の進歩をとげている。

そして、大革命の前後に地理学会を指導した Komarov, V. I., Shchokalskii, I. O. M. 等の努力によつて、国民経済の要求に即応するように地理学会の業績を方向づけ、これによつて地理学会の事業を生きた活潑な行動力あるものとし、あの嵐のような時代に、その權威を失墜せしめなかつた。

フランスの科学ジャーナリスト Barner, L. の記すところによると、スプートニック時代の今日のソ連科学者の主要目標が、地理学の部門においてはひとつには北極研究で

あり、またシベリアの経済開発であり、さらに中央アジアの乾燥地研究にあることを明らかにしている。<sup>②</sup>

ソ連大百科辞典の地理の分冊の記すところでは、ソ連地理学の研究の重点が自然地理(土壌・気候・植生・海洋・陸水・地形)・経済地理(資源論・経済の適正配置)・地図学・探検史にあることを明らかにしている。しかも、これらが、強い国家的使命、実践的関心と結びついていることはロシア近代地理学の草創期よりの伝統的性格に基づくものであるとも批評しうるのである。

さらに、一貫して云えることは北東アジアが探検の対象として、研究のフィールドとして、好箇の素材となつたことであつた。ヨーロッパ文明によつて近代科学という武装を行つたロシアの知能と精神は近世に至るまでテラ・インコグニタとして晦冥に閉された天地を、ベーリング以来の大小さまざまな探検によつて次第に解明して行つた。

そしてその主体となつたロシア近代科学の基盤こそ、ロモノソフに代表される様な啓蒙的な唯物論的合理主義であつたこともまた否定し得ないのである。

敬虔なスラブの精神はヨーロッパ的合理主義によつて還

俗せしめられ、そこに萌芽した探究のころは商業資本主義という苗床にはぐくまれ、北東アジアというゆたかな沃土のなかで、次第に近代地理学を成長せしめたのであつた。

- ① Skelton, R. A.: *Decorative Printed Maps of the 15th to 18th Centuries*, 1952, p. 35.
- ② *ibid.*, p. 36.
- ③ Bagrow, L.: *Geschichte der Cartographie*, 1951, S. 360.
- ④ Farrington, B.: *Greek Science*, 1953 Vol. II Chap. 4.
- ⑤ Bernardus Varenius: *Geographia generalis*, 1650. これに關しては小野鉄二『西洋地理学史』（岩波講座地理学）参照。また最近野間三郎教授が『現代の地理』昭三五、pp. 35—37に差意の文を簡潔に記された。
- ⑥ Günther, S.: *Geschichte der Erdkunde*, 1904, S. 71 ff.
- ⑦ 和辻哲郎『倫理学』下巻 昭二四 一八九頁。
- ⑧ Ruge, S.: O. Peschel's *Geschichte der Erdkunde*, 1877, S. 230 ff., Kretschmer, K.: *Geschichte der Geographie*, 1923, S. 69.
- ⑨ 佐久間鼎『ゲシュタルト心理学の立場』昭一八 四一～五二頁。
- ⑩ Eckert, M.: *Die Kartenwissenschaft*, Bd. 1, 1921, S. 50.
- ⑪ 水津一朝「未開人の地図」『日本史研究』七 昭二三 四六頁。
- ⑫ Nordenskiöld, A. E.: *Periplus: Facsimil Atlas of Stevenson, E. W.: Geography of Claudius Ptolemy*, 1932, p. 5.
- ⑬ 小葉田淳『日本と金銀島』昭一八 六頁。
- ⑭ 小葉田、前掲書六頁。
- ⑮ Periplus Maris Erythrae (村川堅太郎「エリネートウラ海航海記」) (Schoff) S. 6.
- ⑯ 小葉田、前掲書一三・一四頁。
- ⑰ Ferrand, G.: *Relation de Voyages et Textes Géographiques Arabes*, 2 toms. 1913-14.
- ⑱ Ferrand, G.: *Le Wâik Wâik est-il le Japon?* *Journal Asiatique*, 1932.
- ⑲ 村上直次郎訳『ユクナンノ金銀探検島報告』（原著一六一四頁）訳註（昭和一六年）
- ⑳ トレークの探検に關して Teleki, P. *Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischer Inseln*, 1903, S. 132 以下タキマンに關して S. 45.
- ㉑ *Thule* に關しては織田武雄『古代地理学史研究』昭三四、きた『史林』第三八巻、第二号の「ユクナンとトマン」参照。なか、織田先生は Bagrow の著書など多くの資料を食与られた。御教示とともに謝意を表した。
- ㉒ René Legendre: *La Découverte des Mers*, 1948, p. 28. また水津一朝「古地図にあらわれた北大西洋の性格」『人文地理』第一巻第三号、昭二四がその問題に及べた。
- ㉓ Skelton, R. A.: *Explorers' Maps*, 1958, p. 99.
- ㉔ Hakluyt, R.: *Principal Navigation of English Nations*, 1589, Vol. 1, pp. 241-54.
- ㉕ Skelton, R. A.: *op. cit.* p. 105.

② Hakluyt, R.: op. cit. Vol. II, p. 224.

③ Skelton, R. A.: op. cit. p. 180.

④ Skelton, R. A.: op. cit. p. 110.

⑤ 徳文刊本 1755 年 の Moxon の 世界 図「オランダの 海 運 實 績」A brief discourse of Passage by North-Pole to Japan, China & C. London, 1674. 2 ヲ 1 ヲ 幅 和 和 語 による。Skelton, p. 110.

⑥ Wood の 計画「航海の 経 緯 による」An Account of Several late Voyages and discoveries to the South and North, London, 1694.

⑦ 17 世紀 の 事情 に 関 する 角 山 栄『キリスト 絶 対 主 義 の 経 緯』昭 和 三 十 三 年。越 智 助 教授 の 御 教 示 による。

⑧ ⑨ ニ ン マ ン ト キ ー『海 の 発 見』(ニ ン マ ン ト 文 庫)が 綜合 的 に して 記 述 した こと。

⑩ 角 山 栄『前 掲 書 五 三 一 五 八 頁。』

⑪ ヤ ロ ン ト キ ー・石 川 郁 男 訳『封建 農 奴 制 ロ ン ト における 商業 資本』一 九 五 六、六 五・八 九・一 一 五・一 一 六・一 一 八 一 各 頁。

⑫ 匡 図 2 ヲ Nodenskiöld, A. E.: Periplus 1897, 所 収。

⑬ Nordenskiöld, A. E.: The Influence of the "Travels of Marco Polo" on Jacobo Gastaldi's Maps of Asia. Geogr. Journal, Vol. XIII, 1899, p. 396.

⑭ Ramusio Text による 2 ヲ Baddeley: Russia, Mongolia, China, 2 冊 による Taylor, E. G. R.: Tudor Geogr. p. 274. 2 ヲ Ramusio Text. 1559 ① Lib III. ② による 2 冊 による 2 ヲ による。

⑮ Yule, H.: Travel of Marco Polo, Vol. II, 1921, p. 119, 123.

⑯ Charignon, A.J.H.: Le Livre de Marco Polo, Livre II. p. 265.

⑰ Yule, H., op. cit. p. 120 ① Cordier ② 註。

⑱ 中 村 実「東 洋 の 中 世 図」『東 洋 史 大 水 滸 記 録』A-19, No. 88 1958, p. 81. 同 誌 の 地圖 部 に 地圖 2 冊 による。

⑲ 17 世紀 の 世界 図 Nordenskiöld: Periplus: Facsimil Atlas 1889, 及 び Teleki, P. G.: Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen Inseln, 1909 による 2 冊 による。

⑳ Grosse Sowjet-Enzyklopädie, Geographie, 1956, S. 53. 2 年 刊「東 洋 附 属 地 による」。オランダ ロン ト キ ー・ロ ン ト 東方 海 運 史 参 照。

㉑ Müller, G. F.: Sammlung Russischer Geschichte, Bd. III, 1758. ① ロン ト キ ー に 関 する 綜合 的 著 作 Golder, F. A.: Russian Expansion on the Pacific, 1914, p. 268-281 による 2 冊 による。オランダ ロン ト キ ー の 記 述 に 対 する 反 論 pp. 67-95. Golder に対する Berg の 駁 論 は 小 場 有 米 訳『カムチャツカ 発見 2 ヲ ロン ト キ ー 参 照』第 四 章 による。

㉒ Bagrow, L.: The First Russian Maps of Siberia and their Influence on the West-European Cartography, IMAGO MVNDI, IX, 1952, p. 83.

㉓ Berg, L. S.: Russian Discovery on the Pacific, The Pacific Russian Scientific Investigations, Leningrad 1926, p. 5, p. 7.



- ④ Bagrow, L., op. cit. の解説及び facsimil が参照。  
 ④ Baddeley, J. F.: Russia, Mongolia, China, 1919, 222 の facsimil を参照し解説を参照。羽田明生先生の御教示による。  
 ④ Three Years Travels From Mocow over-land to China, London 1706 (天理中央図書館蔵) に所収。(圖説・撮影を許された富永牧太館長「韓旋の労をなされた大脇武夫氏の御好意に感謝を表す」)。  
 ④ Bagrow, L. op. cit.: 参照。  
 ④ 水津「前掲論文」p. 52. 4 の副 Drüber, Hutrowicz なる 2 人の類のものを記載する。水津助教の御教示による。  
 ④ A Bejton und Seine Karte von Amur. IMAGO MYNDII 1935. SS. 47-48. Nordenskiöld の Periplus, p. 66 による。IMAGO MYNDII の複製は V. F. の執筆者の手によるが、ただ 1680 年当時の推定には疑問がある。  
 ④ Muhammed eben-Ali ebn-Ahmed al-Sarf of Stax による 'ペルシヤ' (Nordenskiöld: Periplus)  
 ④ 高橋正雄の複製による「東洋史」による。  
 ④ Section, Klimata の E. Elliot, Sir H. Ms Dowson, J.: Early Arab Geographers, 1956, 224  
 ④ Arabische Welt- und Länder Karten, Asia. I. Nord- und Ost Asien, 1929, S. 93, 94.  
 ④ ヴェナツェ「欧羅巴とモンゴリアの東洋研究史」昭一 P. 371 にも引かれた記述がある。  
 ④ 藤本勝次「インシホルダーと「シタヤ商人とロシア商人の旅」翻訳『東洋史研究』第一巻五・六号 pp. 59-65. ④ 参照。  
 ④ Berg, L. S.: op. cit. p. 8. 北方先史文化のうつし 藤岡先生は昭和二十七年講座で発表された。  
 ④ Berg, L. S.: op. cit. pp. 8-9.  
 ④ Golder, F. A.: op. cit. p. 113.  
 ④ Berg, L. S.: Op. cit. p. 9.  
 ④ Golder, F. A.: Bering's Voyage, Vol. I 1922 p. 6, 7.  
 ④ Berg, L. S.: op. cit. p. 13.  
 ④ Du Halde の著作及び D'Anville の Atlas は高橋正雄先生の御蔵書を使用を仰ぐただ、御教示を得た。  
 ④ Bagrow, L. S.: op. cit. p. 83, Geschichte der Cartographie. 1951, S. 340.  
 ④ ヴェナツェ「前掲書」p. 403.  
 ④ 上記のうつしは「シタヤ商人」のシタヤ年代史も記している。  
 ④ Berg, L. S.: op. cit. p. 11.  
 ④ Ruge, S.: a. a. o. S. 462.  
 ④ 室賀信夫先生の御教示による。  
 ④ 正しくは皇輿全覽図という。黒田源次「皇輿全覽図のうつし」『滿洲史学』第一巻第一号「森鹿三先生の御教示による」。  
 ④ ヤロンスキンスキー「前掲書」参照。  
 ④ ヲノロキツツツツツ Tikheniow, P.: Historical Survey on the Russian Activity, St. Petersburg 1861. 226 へなしている。

- ① Golder, F. A.: op. cit. p. 114.  
 ② ヴェネツィヤ、前掲 p. 376.  
 ③ 大ニズキ、Bouvet, J.: Histoire de L'Empire de la Chine, 1699.  
 ④ ノンニヤナノーン『東西思想交流史』昭一八、第六章。  
 ⑤ Berg, L. S.: op. cit. p. 10. カトマツカ発見とユーリシタの発見、第一編第五章、その他、未見であるが、最近ヨーロッパで刊されたものが若干出版されてゐる。  
 ⑥ Vernadsky, G.: History of Russia, 1951, Chap. 8.  
 ⑦ Grosse Sowjet-Enzyklopädie, Geographie, 1956, S. 18.  
 ⑧ Berg, L. S.: Geschichte der Russischen Geographischen Entdeckungen, 1954, S. 258.  
 ⑨ ヴェネツィヤ、前掲書 p. 406, 414。  
 ⑩ Berg, L. S.: Geschichte……, SS. 256-258, Grosse Sowjet Enzyklopädie, Geogr. SS. 21-24.  
 ⑪ Berg, L. S.: Geschichte……, S. 255.  
 ⑫ Grosse Sowjet Enzyklopädie……, S. 24.  
 ⑬ Berg, L. S.: Geschichte……, 2 Litke, F. P. (SS. 100-101, S. 120), Semjonow, P. P. (S. 134, SS. 193-197 SS. 203-204) が記されたこと。  
 またセムジョーノフ、樹下節訳『天山紀行』昭三三の解題参照。  
 ⑭ エリ・ユス・ベルグ、大橋国太郎訳『露西亜地理学会九十五年史』(一)『書香』一五卷三号、昭一八、二八頁、は一九四一年一月三十一日の地理学会総会に於て発表されたもの。また Berg,

- L. S.: Istorii Nauk 1956 参照。人名はこれによつてロー字化した。  
 ⑮ 前掲三〇頁。  
 ⑯ 前掲三二頁。革命前のロシア正統派統計学のあり方は W. S. Woytinsky の Welt in Zahlen, 1925-28, World Population and Production 1953. などにも見られる実証性と濃厚さを誇るものであつた。Woytinsky はハテルスブルグ大学卒業後、一九一七年三月までシベリア流刑地にあつた。  
 ⑰ シチエツロン、吉村柳里訳『シベリヤ年代史』昭一八(原著一八八三)六八三頁、六八四頁。  
 ⑱ ヴェネツィヤ、露西亜地理学会九十五年史(三)書香一五卷六号三二頁。また東部シベリアの開発が現在学士院の指導で行われていることについては鶴岡重成「東部シベリアの開発——イルクニック全体会議報告集(東部シベリア生産力の発展)——『ナウカ』(密)一九六〇、Vol. VI, No. 5-6.  
 ⑲ Barnier, L.: A Quoi Révent les Savants Sovietiques 1958. (中村和雄・喜谷喜夫訳『ソ連の科学者は何を夢見たか』一九五九、ロハク)  
 ⑳ Hooson, J.H.: Some Recent Developments in the Content and Theory of Soviet Geography, A. A. A. G. Vol. 49, No. 1959, pp. 73-82.  
 [附記] なお、第2図・第7図は筆者の不注意と、製図過程で校正の余裕がなかつたために、不完全なものとなつたことをおこつたりする。

# Russia and North-eastern Asia in the Geographic Recognition

by  
Akio Oshino

This article consists of the following three main objects :

(1) I treat European recognition of Asia and the *Kingin* 金銀 Island as a background of accelerating their recognition, investigating the conditions that English research for the north-eastern route according to this condition happened to contact with Russia, which was stimulated to advance to the east. (in the first and second chapter.)

(2) the transition to the scientific exploration, such as Bering as a representative, after the eighteenth century and as a result, a great contribution in enlightenment of the North East Anian Strait, which each map in each step. And then the map of Siberia by Cossak bearing some resemblance to that by Arabian. (in the fifth and sixth chapters.)

(3) the geographic exploration in the eighteenth century consisted in a link of modernization policy by Peter the Great, supported by the European arrangement of scientific system and led by scholars of the western Europe.

In such circumstances Russian geographers were trained, the modern geography of Russia was formed and among them was a leading person Lomonosov. In the cradle of Russian modern geography the north-eastern Asia was a material and field, the mother of the Russian modern geography. (in the seventh chapter.)

## Reexamination of *Shinabe* 品部 *Zakko* 雜戸 System

by  
Hisashi Kano

It is the *Zakko* 雜戸 system to discriminate the *Shinabe* 品部 system before The *Taika* 大化 era from the *Shinabe-Zakko* 品部雜戸 system of